

使徒の働き21章 「キリストの平和のための苦しみ」

1A 迫害による宣教の実 1-16

1B ツロの兄弟たちの愛 1-6

2B 宣教拠点なるカイサリア 7-14

1C 伝道者ピリポの家の滞在 7-9

2C 預言者アガボによる警告 10-14

3B ギリシア系ユダヤ人の家の滞在 15-16

2A エルサレムにおける騒動 17-40

1B 律法に熱心な教会 17-26

1C 異邦人への神の御業の報告 17-19

2C ユダヤ人としてのパウロ 20-26

2B 隔ての壁 27-40

1C 「ギリシア人が宮の中」という騒ぎ 27-30

2C 異邦人への引き渡し 31-36

3C ギリシア語からヘブル語へ 37-40

本文

使徒の働き21章を開いてください。私たちは、前回、パウロがエルサレムに向かう旅を急いでいたところを見ました。小アジアのエーゲ海沿岸の町ミレトスに船が着いたら、エペソの長老たちを自分のところに呼び寄せて、これからエルサレムに行くけれども、聖霊によって、そこでは鎖と苦しみが続いていることを示されていると告げました。それで、死をも覚悟して、「20:25・私の顔を、あなたがたはだれも二度と見ることはないでしょう。」と言いました。彼らは声を上げて泣き、パウロの首を抱いて何度も接吻しました。そして、パウロを船まで見送ったとあります。彼らの間にある兄弟愛が伝わってきます。

1A 迫害による宣教の実 1-16

これから21章で見えていくところも、エルサレムに行くまでの旅で兄弟たちに会うところを見てください。

1B ツロの兄弟たちの愛 1-6

¹ 私たちは、彼らと別れて船出した。コスに直航し、翌日ロドスに着き、そこからパタラに渡った。² そこにはフェニキア行きの船があったので、それに乗って出発した。

コスもロドスも、沿岸に浮かぶ島です。そしてパタラは、再び小アジアの南の沿岸にある港です。パウロの一行は、沿岸一帯を何百と行き来していた小型船に乗っていたと考えられます。沿岸の

辺りを動き、夜になると港に停泊するような船です。

コス島もロドス島も、ギリシアの歴史の深い、今も観光名所になっているところです。コスは医学の父と言われるヒポクラテス誕生の地です。ロドスには、世界の七不思議に入っている、ヘリオスという太陽神をかたどった巨象がありました。両足を広げて立つ灯台になっていました。パウロの時代には壊れていたそうです。そして、パタラでついに大型船に乗り換えることができました。

この大型船はフェニキア行きで、640 日先になります。この船は、おそらく穀物や果物を輸送船であり、約五日間の船旅となります。フェニキアはシリアの海岸地帯ですが、今のレバノンに当たり、ツロやシドンがあります。エリヤがやもめに会ったところ、また、イエス様がカナン人の女に会って、その娘から悪霊を追い出したところです。そのカナン人の女の証しが、ツロに福音が伝わった時に、人々が信じて行った布石となっていたことでしょう。

³ やがてキプロスが見えてきたが、それを左にして通過し、シリアに向かって航海を続け、ツロに入港した。ここで船は積荷を降ろすことになっていた。^{4a} 私たちは弟子たちを探して、そこに七日間滞在した。

船はキプロスの南を航行したようです。第一次宣教旅行で初めに訪問したところですから、パウロは特別な思いがあったことでしょう。ルカはそれでわざわざここで記しているのだと思います。そしてツロに入港しました。パウロは急いでいましたが、七日間滞在していました。船の積荷を降ろして停泊する日数でした。しかし、パウロはその時を兄弟たちに会う貴重な期間としました。

ツロ、またこのフェニキアの地域に兄弟たちがいるというのは、かつてステパノの殉教によって逃げて行った人々が主のことばを語っていった結果であることを思い出してください。「11:19 さて、ステパノのことから起こった迫害により散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで進んで行ったが、ユダヤ人以外の人には、だれにもみことばを語らなかった。」そしてステパノの殉教と、エルサレムにおける弟子たちに対する迫害は、パウロ自身が引き起こしたものであることを思い出してください。「8:1 サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた。」つまり、自分が迫害したことによって、ここにいるツロの人々は主の弟子となったのです。

イエス様は、イザヤの預言で「不思議な助言者(9:6)」と呼ばれています。私たちの思いをはるかに超えたところで、ご自分の目的を達成されます。パウロは迫害者でしたが、今、ツロの弟子たちは次に読むと分かりますが、パウロとともに慕っていることがよく分かります。ここには、昔、パウロの行ったことは過ぎ去って、ただ神の恵みによって救われたという喜びしかないでしょう。かつてヨセフが兄たちに、自分を兄は売ったが、エジプトに遣わしたのは神なのだと言いました。同じように、パウロによる迫害を神は、自分たちが信じるために用いて下さり、またパウロ自身が回心して、

自分たちの兄弟になったのだということです。

^{4b} 彼らは御霊に示されて、エルサレムには行かないようにとパウロに繰り返し言った。

パウロに聖霊が、鎖と苦しみが自分を待っていると示しておられましたが、ツロの弟子たちにも示されました。そこで弟子たちは、パウロを思う心から、エルサレムに行かないようにと繰り返し言っています。後で行くカイサリアでも、聖霊による明確な示しがあります。エルサレムに近づけば近づくほど、その苦難のことがますます明らかにされていくようです。

⁵ 滞在期間が終わると、私たちはそこを出て、また旅を続けた。彼らはみな、妻や子どもたちと一緒に町の外まで私たちを送りに来た。そして海岸でひざまずいて祈ってから、⁶ 互いに別れを告げた。私たちは船に乗り込み、彼らは自分の家に帰って行った。

ミレトスで長老たちと別れを告げた時と同じように、とても感傷的な別れとなりました。町の外まで家族全員を連れて送りに来て、また海岸でひざまずいて祈っています。主に心から嘆願する祈りの姿勢です。

2B 宣教拠点なるカイサリア 7-14

1C 伝道者ピリポの家の滞在 7-9

⁷ 私たちはツロからの航海を終えて、プトレマイスに着いた。そのの兄弟たちにあいさつをして、彼らのところに一日滞在した。

プトレマイスは、フェニキア地方の南端にある町で、旧約聖書ではアツコ(士師 1:31)と呼ばれます。今のイスラエルの国もアツコと呼んでおり、オスマン帝国時代と十字軍時代の遺跡が残っています。ナポレオンがここまで来てオスマンに戦い、敗けてしまったという歴史もあります。

ここにも兄弟たちがいて、彼らは挨拶しました。ここに兄弟たちも、パウロの迫害によって散らされた人々の宣教によって信仰を持った人々でしょう。ところで、パウロの一行にとって、旅における兄弟たちの家での宿泊は、貴重な交わりの時であり、また当時、旅人をもてなす文化が色濃くありました。旧約聖書には、外で寝るのは危険であるとして、見知らぬ人でも迎え入れる話が、ロトのところでも、また士師記でも出てきます。ヘブル書には、「13:1-2 兄弟愛をいつも持っていなさい。2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。」という勧めがあります。

⁸ 翌日そこを出発して、カイサリアに着くと、あの七人の一人である伝道者ピリポの家に行き、そこに滞在した。⁹ この人には、預言をする未婚の娘が四人いた。

アッコから出発して、陸路であったのか、再び船であったのか分かりませんが、南に 50 ㎞行くとカイサリアがあります。途中、カルメル山があり、そこを越えるとシャロンと呼ばれる平原が広がります。そこに、ローマのユダヤ属州の首都であった、巨大な港町カイサリアがあります。

既に私たちは、このカイサリアで、ローマの百人隊長コルネリウスの一家が、ペテロの福音宣教によって信じたところを見ました。そして、本文では、ここに伝道者ピリポの家があったとのことです。覚えていますか、エルサレムの教会でやもめの配給で問題が起りましたが、七人のギリシア語を話すユダヤ人が、食卓に仕える者として選ばれました。その一人がピリポです。

そして、パウロの迫害によって、エルサレムから散らされていった時に、ピリポはサマリアの町に伝道しに行き、そこで大いなる神の御業が起りました。ユダヤ人という枠組みを超えて、福音を宣べ伝えた器として初めに用いられた人です。そして、彼は御霊によって、ガザに行く途中の道でエチオピア人の宦官に会って、イエス様を宣べ伝えて、宦官は信じました。それから、カイサリアに行っています。「8:40 それからピリポはアゾトに現れた。そして、すべての町を通して福音を宣べ伝え、カイサリアに行った。」カイサリアに定住して、伝道活動の拠点となっていました。こうしてピリポも、恵みの福音によって、迫害者のパウロと兄弟、また同労者として深い絆がありました。

ところで、興味深いことに、「この人には、預言をする未婚の娘が四人いた。」とルカはわざわざ書き記しています。ペテロが初めに書き記した、「2:17 すべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがた息子や娘は預言し」とありましたね。男だけでなく、女も、しかも娘のような若い子たちにも、御霊が注がれていることをよく示しています。若い時から主に用いられているということは、すばらしいですね。カルバリーチャペル・コスタメサの礼拝賛美は、スコット・カニングハムさんという方が賛美を導いていますが、賛美チームには、娘さんたちが何人かいます。その長女であるマディソンさんは、大きくなり、結婚しましたが、彼女はソロでアルバムも出しています。

そして預言であります、必ずしも将来のことを予告するようなものだけでなく、主に、「人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって」話す言葉であります(I コリ 14:3)。パウロは、コリント第一 14 章で、「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。(1 節)」と言っていますから、兄弟愛のゆえ、人に語る言葉、建徳や勧め、慰めになる言葉を語るができるように、その御霊の賜物を求めていきたいですね。

2C 預言者アガボによる警告 10-14

¹⁰ かなりの期間そこに滞在していると、アガボという名の預言者がユダヤから下って来た。¹¹ 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って言った。「聖霊がこう言われます。『この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる。』」¹² これを聞いて、私たちも土地の人たちもパウロに、エルサレムには上って行かないようにと懇願した。

預言者アガボがやってきました。その前に、「かなりの期間そこに滞在していると」とありますが、パウロの一行は、カイサリアまで来て、エルサレムでの五旬節の祭りまでまだ時間の余裕があるのを見てとって、ここで滞在することになっていたようです。

そしてアガボですが、彼は慰めや励ましの言葉というよりも、旧約時代の預言者がそうであったように、明確に、将来のことを告げる働きを行っていました。アンティオキアの教会に、ユダヤから下って行った時のことを思い出してください。「11:27-28 そのころ、預言者たちがエルサレムからアンティオキアに下って来た。その中の一人で名をアガボという人が立って、世界中に大飢饉が起こると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。」この預言によって、バルナバとパウロは、支援物資をユダヤの兄弟たちのところに持って行きました。

その預言の行ない方が、行動を伴ったもので、パウロの帯で自分の両手と両足を縛っています。旧約時代の預言者たちも同じように行いましたね。イザヤ、エレミヤ、エゼキエルは、特にエゼキエルは、行動によって神の語られていることを民に伝えようとしていました。

そして、これまでになく、明確に、何が起こるかをアガボは語っています。それは、ユダヤ人たちがパウロを縛り、そして、異邦人の手に渡す、ということです。つまり、ローマ当局に引き渡すということです。覚えていますね、これはまさに、主イエスご自身が受けた苦しみです。パウロは、まさにイエス様の受難を後追いつているような旅をしています。主は、かなり前からご自身が苦しみを受けることを知って、それでガリラヤからエルサレムに向かう旅をしておられました。そして、弟子たちにも何度となく、そのことを明かされました。

今度は、カイサリアの人たちだけでなく、パウロの一行も、行かないでほしいと懇願しています。これは、主ご自身がそうであったように、ローマによって処刑されることも考えるべき事態であることに気づいたからです。

¹³ すると、パウロは答えた。「あなたがたは、泣いたり私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています。」¹⁴ 彼が聞き入れようとしないので、私たちは「主のみこころがなりますように」と言って、口をつぐんだ。

パウロの生き方には、一貫して二つの特徴があります。死ぬ覚悟ができているということです。それは、ピリピ書にありますが、死ぬことも益であり、なぜなら主と共にいることを意味するからです。そしてもう一つの特徴は、それゆえに無駄な歩みをしない、使命のために一点集中して動いているということです。競争選手のように、目標のために益になることを行い、そうでないものは捨てていました。生きることも、死ぬこともキリストという姿勢だからこそ、本当にしなければいけないことをすることができたのです。

そして、午前礼拝でお話した、「主のみこころがなりますように」という言葉を彼らが発しています。イエス様がゲッセマネの園でそうであったように、苦しみを受けるのも、父の願われるようにと
言われて、使命を全うされたのです。パウロは主ご自身から、初めに告げられていました。アナニアという弟子に言われていました。「9:15b-16 あの人是我の名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。16 彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」

3B ギリシア系ユダヤ人の家の滞在 15-16

¹⁵ 数日後、私たちは旅支度をしてエルサレムに上って行った。¹⁶ カイサリアの弟子たちも何人か私たちに同行して、古くからの弟子である、キプロス人ムナソンのところに案内してくれた。私たちはそこに泊まることになっていたのである。

カイサリアから南東に 100 キロ、徒歩で二日かけてエルサレムに到着します。パウロの一行に、カイサリアの弟子たちも同行してくれました。そして、「古くからの弟子である、キプロス人ムナソン」の家に泊まっています。バルナバもキプロス出身でしたね。ギリシア語を話すユダヤ人、ヘレニストのユダヤ人の間でパウロが迎え入れられています。これからエルサレムに行きますが、同じ兄弟だとしても大きく雰囲気が変わってしまうところに行きます。律法に熱心で、ユダヤ人であることを誇りに思っている人々が住んでいるところです。

2A エルサレムにおける騒動 17-40

1B 律法に熱心な教会 17-26

1C 異邦人への神の御業の報告 17-19

¹⁷ 私たちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。

ついに、エルサレムに到着しました。エルサレムの教会は、おおむね、パウロの一行を歓迎しています。この中には、ルカを含めて異邦人もいました。けれども、喜んで受け入れました。後で彼ら自身を取り上げますが、かつて会議を開いて、異邦人に対してはモーセの律法を課してはならない。ただ、ユダヤ人との交わりを妨げるような偶像礼拝や血を食べることなどを避けてほしい、ということでした。神が異邦人をもお救いになっているということ、エルサレムにいる教会の人たちも知っていました。

ルカはここで書き記していませんが、パウロが後でローマ総督フェリクスに弁明する時に、「24:17 さて私は、同胞に対して施しをするために、またささげ物をするために、何年ぶりかで帰って来ました。」と言っています。手紙の中でも、何度となく、異邦人の主体の教会を巡っては、献金を募っていたことを言及しています。パウロは、異邦人がキリストにあって、ユダヤ人の兄弟たちを愛し、また霊的な祝福は彼らから来たのだから、物質的なものでお返ししました。こうして、キリストの体というものが、ユダヤ人と異邦人がこの方において一つであり、キリストが平和となっ

ったことを示したのです。

¹⁸ 翌日、パウロは私たちを連れて、ヤコブを訪問した。そこには長老たちがみな集まっていた。

ヤコブまた長老たちがみな集まっています。パウロの一行がやってきたということは、教会として受け入れ、また交わるべき大切なことだとみなしていました。そして、ペテロやヨハネの姿がありません。ペテロは、すでにいろいろな所を巡回していたのを以前に読みましたね。ガラテヤ人への手紙には、ペテロがアンティオキアで異邦人の兄弟たちと食事をしていた場面が出てきますし、第一の手紙は、トルコのポントス、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビティニアにいる信者たちに手紙を出しているの、ペテロがトルコのほうで宣教の働きをしていたことは確かです。ヨハネも、福音書、三つの手紙、そして黙示録はエペソから書いていると思われます。他の使徒たちも他のところに巡回しているのでしょう。イエス様の半兄弟であるヤコブが、エルサレムにある教会の監督になっていることが分かります。その前のエルサレム会議でも、ヤコブが最終的に、聖霊の導きを仰ぎながら、異邦人の救いを確認しました。

¹⁹ 彼らにあいさつしてから、パウロは自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ説明した。

パウロやバルナバがここに来た時も、同じようにして、異邦人の間で神がなされたことを説明しました。その時、15章ですが、パリサイ派の者で信者になった者たちが立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきである。」という者たちが出てきました(5節)それで多くの論争があり、ペテロが立ち上がってコルネリウス一家に聖霊が降り注いだ話をして、異邦人にも救いが与えられる神のご計画を話しました。その後、続けてパウロとバルナバが、「異邦人の間で行れたしと不思議について」話しました(12節)。そしてヤコブが立ち上がって、最終決断をしたのであり、今、聞いている人々の指導者たちの間では異邦人への救いを喜んで聞いています。

皆さんは、私たちから過去に、他の地域での働きを主が祝福されたという報告を聞きましたね。他の報告は聞いたことがあるでしょうか？自分がほとんど聞いたこともない国で、神が驚くべき働きを行われていることを、宣教師たちは本国に戻ってきて報告します。私自身は、日本で神が行われていることを話すと、アメリカの教会の人たちはとても喜びます。ところが、一部に無感動というか、関心のない人たちもいます。神が、あらゆる民族、あらゆる国、あらゆる言語の間でキリストの救いを与えておられるご計画に触れて、本来なら喜ぶはずなのですが、自分の国のことだけ、自分の周りのことだけ、酷い時は、自分たちのやり方と違うということで批判する人たちさえいます。

2C ユダヤ人としてのパウロ 20-26

次からヤコブたちが伝える現実、そういった人々のことです。かつて異邦人にも割礼を受けさ

せるべきだということまで言っていました。今は、おそらくは教会の指導に従い、そこまでは強要しません。けれども、自分たちは律法に熱心な人たちです。律法の完成者であられるキリストをどれだけ明確に見えているのか？ 自問自答しなければいけないような人々です。

²⁰ 彼らはこれを聞いて神をほめたたえ、パウロに言った。「兄弟よ。ご覧のとおり、ユダヤ人の中で信仰に入っている人が何万となくいますが、みな律法に熱心な人たちです。

イエスこそが来るべきメシアだと信じたユダヤ人たちが大勢、起こされました。それはすばらしいことです。イエス様が復活されたので、死者の復活を信じているパリサイ派の人たちには、大きな確証となったことでしょう。けれども、そのまま律法は熱心に守っていました。このような傾向があったことは、ヘブル人への手紙を見るとよく分かります。イエスを信じていながらも、ユダヤ教の慣習を守り続けているユダヤ人信者が、イエスを告白することによって迫害を受けるので、次第にユダヤ教の中に埋没してしまう危険がありました。そこに対して警鐘を鳴らしている手紙です。

律法を守ることは、それが救いにならないことが分かっているにしろよいのですが、しかし、律法の目標はキリストご自身であり、キリストこそが目を向けるべきお方です。ヘブル書の著者は、そこで、「より優れている」と言う言葉を使って、モーセよりも優れた仲介者がイエスであり、アロンの祭司職よりもすぐれた、メルキデゼクの祭司の位の偉大な祭司であり、古い契約では取り除かれなかった罪が、新しい契約によって取り除かれ、というように、キリストこそが私たちを救うことを、何度となく話しています。

²¹ ところが、彼らがあなたについて聞かされているのは、あなたが、異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習にしたがって歩むなと言って、モーセに背くように教えている、ということなのです。

パウロは、そんなことは教えていません。異邦人に対して、救われるためにモーセの律法を守る必要はない、ユダヤ教に改宗する必要はないと教えていました。けれども、ユダヤ人に、割礼をやめさせたり、慣習をやめさせたりしていません。ただ、割礼は肉の割礼以上に心の割礼が大事であり、祭りも安息日もキリストが本質であると教えていました。これは、それらの律法を守り行っただけではいけないということではありません。パウロ自身が、誓願を立てていたため、ケンクレアで髪を剃った、という場面もあります(18:18)。パウロは自分自身がユダヤ人であることをやめていませんでした。ユダヤ人の慣習にも従っていました。

しかし、ステパノが説教していた時と同じように、ユダヤ人たちが大切にしているものについて、それらをあまりにも大切にせず、本質、神との関係をないがしろにしていることを指摘しました。ある意味、神よりも神殿を大切にしていた、神殿や儀式を偶像視していたともいえるのです。そのことをステパノが指摘したら、神殿を破壊しようとしていると脅威を受けて、それで石打にされました。

パウロの場合は、異邦人の間に住んでいるユダヤ人に、割礼を施すな、慣習に従って歩むなど教えているという非難、中傷を受けることになりました。

日本の習慣や文化に当てはめるなら、キリスト者になって、仏前で線香をあげない、それが偶像礼拝の行為になるからとしてやめると、先祖をないがしろにするのか！という非難が来るのと似ています。いいえ、キリスト者にとって先祖は大切だし、死者を追悼し、敬い、墓も大切にします。偶像礼拝行為になるから避けていることが、これらすべてをやめさせようとしていると脅威に感じるので。

²² それで、どうしましょうか。あなたが来たことは、必ず彼らの耳に入るでしょう。²³ ですから、私たちの言うとおりにしてください。私たちの中に、誓願を立てている者が四人います。²⁴ この人たちを連れて行って、一緒に身を清め、彼らが頭を剃る費用を出してあげてください。そうすれば、あなたについて聞かされていることは根も葉もないことで、あなたも律法を守って正しく歩んでいることが、皆に分かるでしょう。

この誓願とは、民数記 6 章にあるナジル人の請願です。一定期間、髪を剃らず、ぶどう酒を飲まない、死体に触れないなど、自分自身を神だけのものにします。その後で、神の前に出て、髪の毛を剃って、その髪といけにえを献げます。このことを行うのに、仕事をその間、しておらず、また、いけにえを献げるので、金銭的にかなりの犠牲となります。そこで、金銭的に助けてあげて、また自分自身もきよめの儀式を経れば、パウロも律法を守っていることが明らかになるということです。

²⁵ 信仰に入った異邦人に関しては、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、淫らな行いを避けるべきであると決定し、すでに書き送りました。」

これが、ヤコブが前回の協議で最終判断をしたことでした。異邦人には、律法を課してはいけません。けれども、これらのことはユダヤ人との交わりにおいて欠かすことのできないものなので、これだけは避けてほしいということです。パウロの一行の中に異邦人信者もいますから、ヤコブはそのことも配慮したことでしょう。ユダヤ人は律法をやめさせられることはない。異邦人は律法を守るよう強制させられることはない。互いを尊重し、そこで一致を保つという考えです。

²⁶ そこで、パウロはその人たちを連れて行き、翌日、彼らとともに身を清めて宮に入った。そして、いつ、清めの期間が終わって、一人ひとりのためにささげ物をするができるかを告げた。

パウロは柔軟に対応しました。彼は、信仰による救い、恵みの福音をないがしろにしたのではありません。福音以外のことで、不要な対立が起こるのであれば、喜んでこれらのことを行います。パウロは、こう言いました。「I コリ 9:19-20 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユ

ダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。」

2B 隔ての壁 27-40

1C 「ギリシア人が宮の中」という騒ぎ 27-30

²⁷ところが、その七日の期間が終わろうとしていたとき、アジアから来たユダヤ人たちは、パウロが宮にいるのを見ると、群衆をみな扇動して、彼に手をかけ、²⁸ こう叫んだ。「イスラエルの皆さん、手を貸してください。この男は、民と律法とこの場所に逆らうことを、いたるところで皆に教えている者です。そのうえ、ギリシア人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所を汚しています。」²⁹ 彼らは、エペソ人のトロフィモが町でパウロと一緒にいるのを以前に見かけていて、パウロが彼を宮に連れ込んだと思ったのである。

かつて、エペソにおいて、パウロたちに向かって、伝えている福音について悪く言っているユダヤ人、不信仰のユダヤ人たちがいたのを読みました(19:9)。また、エペソでもユダヤ人たちの陰謀があり、パウロに危害を加えようとしていたこともパウロは、話しています(20:19)。そういった不信者であるユダヤ人が、パウロがいるのを見て煽り立てました。今、時期は五旬節です。世界中からユダヤ人が集まっていますが、エペソに住んでいる離散ユダヤ人もここにいたのです。先ほど説明しましたように、ステパノに対する非難と似ています。

そして、「ギリシア人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所を汚しています。」と叫びました。エペソからトロフィモという異邦人がたまたま、エルサレムに来ていました。誓願のために連れて行った四人のユダヤ人なのに、異邦人のトロフィモだと思いこんだのです。ここで、私たちが知らないといけないのは、神殿の敷地には、外庭と内庭があることです。当時のヘロデの建てた神殿では、外庭が異邦人の庭と呼ばれていました。そして、イスラエル人のみが入ることのできる領域があり、初めに婦人の庭があります。これは女性も中に入れる領域です。そして正面にいくと、祭壇の前のところに、男性たちが入る所のできる領域があり、その先は祭司たちのみが奉仕できるところで、祭壇があり、その先に聖所があります。

その異邦人の庭から婦人の庭のところの境に、標識が立っていました。「この先を入れれば、死の責任を取ることになる」という内容のもので、ギリシア語で書かれたその標識は、今、トルコのイスタンブール博物館にあります。こうして、ユダヤ人をユダヤ人たらしめる掟によって、異邦人とユダヤ人には隔ての壁がありました。パウロは、その隔ての壁を壊したのがキリストであり、この方の死であると説きました。「エペ 2:14-16 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、15 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、16 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

このキリストの平和のためにパウロは情熱を注いでいました。そのために、キリストの体はありました。ユダヤ人もギリシア人も、男も女も、自由人も奴隷も、キリストにあって一つなのです！そのために、具体的に、物質的支援をもって異邦人主体の教会から献金も携えてきたのです。そして、ヤコブなどエルサレムの教会の兄弟たちも、知恵を主からいただいて、その一致のために努力していました。けれども、一気に騒動が起きました。いかに、律法に関わる掟が異邦人とユダヤ人の間の隔てになっているかが、ここでよく分かります。

³⁰そこで町中が大騒ぎになり、人々は殺到してパウロを捕らえ、宮の外へ引きずり出した。すると、ただちに宮の門が閉じられた。

宮の敷地において流血は犯してはいけません。それで宮の外に引きずり出して、宮の外でパウロを殺すとしていました。

2C 異邦人への引き渡し 31-36

³¹彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、ローマ軍の千人隊長に届いた。³²彼はただちに、兵士たちと百人隊長たちを率いて、彼らのところに駆けつけた。人々は千人隊長と兵士たちを見て、パウロを打つのをやめた。

ユダヤ人の祭りの時に、ローマ軍は神殿の敷地を監視するために、北に隣接しているアントニア要塞に駐屯していました。これまでの経験で、ユダヤ人たちが世界中から集まる祭りでは、民族的な意識が高揚して、騒動を起こしやすいことを知っていたからです。イエス様の時もそうでしたね、過越の祭りの時でしたが、世界中からのユダヤ人が集まり、いつもはカイサリアにいたローマ総督ピラトが、エルサレムに来ていた最中での出来事でした。それで、すぐにローマの千人隊長の耳に入りました。彼の名は、クラウデイス・リシアと言います(23:26)。

³³千人隊長は近寄ってパウロを捕らえ、二本の鎖で縛るように命じた。そして、パウロが何者なのか、何をしたのかと尋ねた。

一本ではなく、二本の鎖です。重罪人として扱っており、二人の兵士たちの鎖で縛ったと考えられます。

³⁴しかし、群衆はそれぞれに違ったことを叫び続けていた。千人隊長は、騒がしくて確かなことが分からなかったので、パウロを兵營に連れて行くように命じた。³⁵パウロが階段にさしかかったとき、群衆の暴行を避けるために、兵士たちは彼を担ぎ上げなければならなかった。³⁶大勢の民衆が、「殺してしまえ」と叫びながら、ついて来たからである。

アントニア要塞の中に連行することにして、今、階段を上がっています。こうして、アガボの預言

したことがその通りになりました。「この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる。」

3C ギリシア語からヘブル語へ 37-40

³⁷ 兵営の中に連れ込まれようとしたとき、パウロが千人隊長に「少しお話してもよいでしょうか」と尋ねた。すると千人隊長は、「おまえはギリシア語を知っているのか。³⁸ では、おまえは、近ごろ暴動を起こして、四千人の暗殺者を荒野に連れて行った、あのエジプト人ではないのか」と言った。³⁹ パウロは答えた。「私はキリキアのタルソ出身のユダヤ人で、れっきとした町の市民です。お願いです。この人たちに話をさせてください。」

千人隊長は、彼が暴動を起こしたエジプト人だと思っていました。ヨセフスが、このエジプト人についての記録を残しています。預言者と名乗り、民衆をだまして、オリーブ山に集結するように扇動したそうです。その暴徒はローマ総督フェリクスによって殺され、また捕虜とされました。しかし、首謀者のエジプト人は逃げたのです。そのエジプト人が戻ってきたと思ったのです。

だから、ギリシア語を話したのを聞いて、驚きました。それでパウロは、自分はギリシア文化の強い大きな町、タルソ出身のユダヤ人だ。そして、逃亡者でもなく、合法的な市民だと言いました。そして、「この人たちに話をさせてください。」と言います。そう、この時こそ、パウロにとっては証しを立てる機会とみなしたのです。

⁴⁰ 千人隊長が許したので、パウロは階段の上に立ち、静かにするよう民衆を手で制した。そして、すっかり静かになったとき、ヘブル語で次のように語りかけた。

ものすごいですね、彼が手で制すだけで人々が静かになったのです。そして、彼は彼らの言葉、ヘブル語で話しかけました。ついに来ました、パウロが同胞の民、代わりに呪われた者となってもよいと言った(ローマ 9:1-3) 仲間に証しすることになります。

このようにして、パウロはイエス様と同じような苦難の道を辿りました。そしてそれは、異邦人も、ユダヤ人に約束されたメシアを信じる信仰によって、イスラエルと同じように神の家に入ることができるとする、恵みの福音のゆえでした。その一致のために、平和のために多くの犠牲を払っていましたが、ユダヤ人がユダヤ人として持っている律法と慣習のゆえに大きな騒動となります。恵みの福音には犠牲が伴います。キリストにある平和のためには多くの労苦が伴います。私たちも、人々がこの方において神と和解できるよう、神との平和が持つことができるよう、自分自身も奮闘するのです。